



「忠臣蔵三百年」48番目の義士 萱野三平重實③

早駕籠と母の死

貞享4（1687）年、12歳で播州赤穂の浅野内匠頭長矩に仕官し、無事に役目を果たしていた三平ですが、元禄14（1701）年3月14日の事件が、当時の武士として平凡な人生を歩んできた三平の人生を変え、とともに、歴史の表舞台に引き出すことになりました。

江戸城松の廊下で京都から来た勅使（天皇の使い）の接待役を務める長矩が、高家（天皇家と幕府を仲介し幕府の典札を司る役職）筆頭の吉良上野介義央に切りかかり、負傷させた事件の第一報を赤穂へ知らせる使者として、早水藤左衛門とともに事件当日の3月14日午後2時ごろ江戸を出発しました。およそ155里（620km）を早駕籠を乗り継ぎ赤穂へ向かった三平は、18日午後10時ごろに赤穂へ

到着しました。その約4・5日の間、昼夜を問わず駕籠に乗り続けたため、赤穂へ着いたときは2人とも息も絶え絶えであったと伝えられています。（赤穂市内には、三平と藤左衛門が息継ぎに水を飲んだと伝えられる井戸が今も残されています）

映画やドラマなどで、この早駕籠の場面はよく紹介され有名ですが、この早駕籠の途中には、次のような逸話が伝わっています。萱野にある三平の実家は西国街道に面していますので、赤穂へ向かう駕籠も当然ながら実家の前を通りました。そのとき偶然にも実母「小まん」の葬儀に出くわしましたが、主君長矩の急用の途中でしたので、駕籠を降り母の葬儀に参列することができず、涙をのんで三平は赤穂へ急いだと伝えられています。

この話が事実であれば、三平

にとつては余りにも悲しい偶然で、主君の不幸な事件に打ちのめされ、不眠不休で駕籠に揺られ続け、精神的、肉体的に疲れ果てた三平は、さらに母の死に遭遇し二三重の悲しみ、苦しみにも包まれることになりました。

この話が余りにも出来すぎているので後世の「作り話」ではないかと疑いたくもありませんが、事実ではないかと推測される次のような材料があります。萱野5丁目にある共同墓地には、三平を始めとする萱野一族の墓があり、母「小まん」の墓もこの中に建てられています。その墓石の中央には「釋尼妙貞靈位」の戒名、その右に「元禄14年」左に「三月十七日」と没年月日が刻まれています。

先に述べたように、3月14日午後2時ごろ江戸を出発した三平が赤穂に着いたのが18日午後10時ごろですので、およそ毎時6kmの速さで進んだ駕籠が萱野村を通過したのは、3月18日の午前ではないかと推測され（赤穂と箕面の距離は約80km）、母の葬儀が亡くなった翌日に行われたとすれば、先の話を書き付けることになるのです。

母の百ヶ日追悼の句

みじかよや

百の夢路を

かちはだし

涓泉（萱野三平の俳号）



▶ 萱野三平旧邸長屋門